



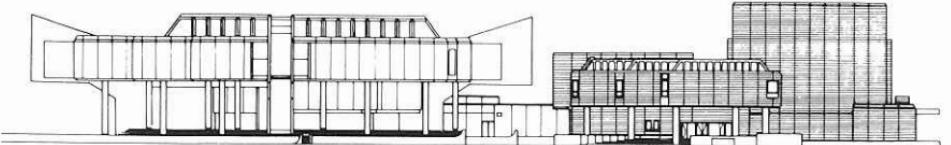
富士三保清見寺図（長谷川雪旦筆）

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

1 October 1994

No. 107



企画展案内

ふたつの富士の図（「百花繚乱の世界—江戸・化政期の絵画—」より）

会期：10月7日（金）～11月13日（日）

表紙は、江戸の長谷川雪旦（1773～1843）の文政7年（1824）の『富士三保清見寺図』。本圖の図は、仙台の菅井梅闇（1784～1844）の文政2年（1819）の『富士山図』である。雪旦と梅闇は、11歳の年齢差はあるがほぼ同世代であり、両者が描いた図の制作年は近い。しかし同じ富士山を描きながら、墨画と着色画の違いも含め両者の描法は大いに異なっている。

雪旦52歳の筆になる『富士三保清見寺図』は、画面に雪旦の落款とは別に「雪舟筆」の墨書がみえ、箱の蓋表にも「雪舟伝授登唐之富士 長谷川雪旦模」と記されている。つまり、本圖は室町時代の雪舟（1420～1506）が中国で描いたという伝承を持つ図樣を、雪旦が模写したものである。雪旦が模写した雪舟の『富士三保清見寺図』の原本は知られず、室町時代の模本が肥後（熊本）細川家に伝来、今日に及ぶ。江戸時代には、細川家所蔵の図は雪舟真筆として広く知られ、模写が多く制作された。

雪旦が「雪舟伝授」の富士を描いたのは、雪旦が雪舟の画系に属すからである。雪旦は長谷川氏を名乗っている。長谷川氏は、桃山時代の巨匠長谷川等伯（1539～1610）を祖とし、等伯は「雪舟五代」を称した画家であった。

この時代は、日本の古い時代の絵画にたいする関心の高まりをみた。雪旦と同じ頃、江戸で雪舟の画系であることを称した絵師に川島雪亭、桜井秋月、堤等琳がおり、九州でも熊本の矢野良勝が知られる。

雪旦については、「増補浮世絵類考」（1844年）に「始め狩野家の門人となり、雪舟の画風を学びて一家をなす。浮世絵にあらずといへども、一蝶の画風をかき、或は唐画の筆意も能す」とある。

富士山図 菅井梅闇筆 2面

狩野派との師弟関係は不明である。『武江年表』の「文化年間記事」に、江戸の画家12名の中に名前がみえ、当時すでに知られる存在であったと考えられるが、年記等によって確認できる作品の多くは文政以降である。

しかし文化年間に実力を認められていたことは、肥前唐津藩小笠原家の御用絵師となっていることからもわかる。文政元年（1818）と文政五年（1822）には、唐津に滞在していることが知られる。本圖は、唐津に所在する作品であり、小笠原家の絵師としての関係から唐津にもたらされたものと推測できる。

雪旦は、雪舟流の作品の一方で、『増補浮世絵類考』に「浮世絵にあらずといへども、一蝶の画風をかき」とあるように、風俗画を多く制作している。むしろ、今日における雪旦の評価はこの風俗画において高いものがある。『江戸名所図会』20冊（1833年刊）は、雪旦が江戸の神社仏閣を中心とした名所を、風俗描写を取り入れながら700点以上の挿図としたものである。時代の息吹の伝わる力作で、当時のベストセラーであると同時に今日雪旦の代表作にされる。

唐津にある雪旦の作品は、本圖も含め雪舟の図様に起因するものが少なからずあるが、風俗画はほとんど存続していない。藩主御用絵師として、描く側にも画を求める側にも、本圖のような由緒ある図様は最もふさわしいものであったといえよう。

雪旦は、雪舟画風並びに風俗描写という両面で、時代の特徴的な絵師であった。



つぎに梅闇の「富士山図」は、横に長い画面に富士山を中心に、近景中央から向かって右と遠景左にも山を描くことで、臨場感と奥行き感のある画面作りに成功している。

本図は、床脇の最上部に設けた袋戸棚、つまり天袋に描かれている。款記に「己卯初冬下浣庵／硯溪雅君徵／梅館主人」とあり、仙台出身の菅井梅闇が肥前有田の正司硯溪（考祺、1793～1857）の求めに応じて描いたことがわかる。

梅闇は江戸で谷文晁に学んだ後、文化10年（1813）頃から文政5年（1822）の夏までの間、長崎に滞在している。「富士山図」は、この長崎滞在中の文政2年10月下旬に梅闇が描いたもので、梅闇の前「梅館」落款を使用した36歳の作品である。

硯溪は当時27歳、後に「経済問答秘録」「家職要道」などを著し學識をもって知られる人物である。また本図は肥前多久の儒者で南蘋流の絵師でもあった草場佩川（1787～1867）の賛をもつ。佩川の賛には年記がなく、後賛である可能性も考えられる。残念ながら、佩川の現存する日記（草場瓊川日記）に、文政2年の分は含まれていない。本図の制作の詳細は不明だが、梅闇が滞在していた長崎に硯溪が赴き制作を依頼したか、あるいは梅闇が有田の硯溪を訪ねたのかいずれかであろう。

梅闇には、田能村竹田や頼山陽をはじめとする多くの人物との交流が知られる。この時代、梅闇のように脱俗を理想として比較的の自由な立場で各地の文人墨客と交わりながら絵画制作をおこなった画家として浦上玉堂、春琴、竹田などおり、梅闇もまた時代の画家であったといえる。

南画山水を多く描いた梅闇としては、この種の

西洋画的な写実描写の作品は比較的少ないが、先行する作品に江戸の洋画家司馬江漢にまねた文化6年（1809）の「七里ヶ浜図」（神戸市立博物館）が知られる。梅闇が本図を伝統的な図様ではなく写実的に描いたのは、すでに江漢によって油彩画の富士山が制作され、京都の祇園社や広島の厳島にも絵馬として江漢の油彩の富士山が奉納されるなど、富士山の写実描写の普及と無関係ではあるまい。

以上、両者の特色ある富士は、この時代の伝統と革新の両極にあるものといえる。しかしながら雪且、梅闇とともに状況に応じた画法を使用したもので、流派や画題の制約から開放されつつある状況がみてとれる。

また江戸と仙台の画家にとっては、肥前は遠隔地である。しかし信仰や遊山の旅が情非に盛んになつたこの時期においては、二人の旅は特別なものではなく、旅の流行によって絵画を含め全国的な文化交流が一気に進展した。

さらに当時は江戸を中心に富士山信仰が盛んで、富士塚という富士を模した塚まで築かれた。葛飾北斎の「富嶽三十六景」（1831年）の制作も間近である。また一方で人々はすでに国際性を持ちあわせ、日本という国家を意識するようになっていた。雪且と梅館によって富士山が題材として選ばれた背景として、この時代、富士山が日本を象徴する山として認識されるようになっていた時代性をあげることができる。

（学芸員 福井尚寿）



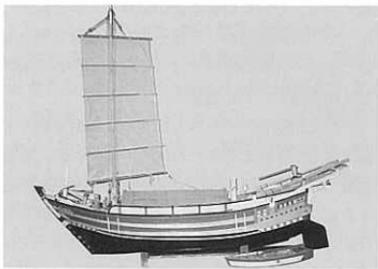
常設展案内

佐賀の船

会期：12月2日(金)～1月22日(日)

物資の輸送が、まだ船運中心だった頃、有明海やそこに流れ込む幾筋もの河川を、さまざまな船が往来していました。それには、六角川沿いの各土場から住之江港に待機する本船までの間を石炭を積んで往復した『上荷船』。また、長崎を物資集積の拠点とし、諸富までの間を輸出品、輸入品を積んで往来した『小廻し廻船』。そして、江戸時代以降、城下町の拡充と大坂・江戸という二大中央市場の出現により全国的海運を手がけた『北前型弁才船』などがありました。

今回は、それらの模型を展示することで、産業の発展を流通の面から担った船の重要性と、それぞれの持つ船型・構造の特徴を探っていきます。



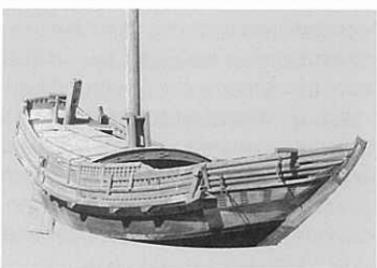
●上荷船（石炭船）模型

大正時代から昭和初期にかけて、六角川で石炭運搬船として活躍した、通称『上荷船』と呼ばれる60トン級の帆船兼用船です。六角川沿いの各土場から住之江港に待機する汽船(本船)までの間を往復した川船で、折りたたみ式の1本マストを持ち、船尾に外艤(追波の打ち込みを防ぐもの)がつかないことを主な特徴とします。40～56トンの石炭を積み、追風に順風満帆で下れば、北方から住之江港まで約3時間を要し、なぎ(無風)の場合は、二挺櫓で漕ぎ4～5時間で下っており、これを月平均5～6回行なっています。長さ6～7m、重さ30～40kgの櫓を、片方を男性が、片方を女性が漕ぎ、まさに過酷な労働でした。上荷船が機械化され、いわゆる『機帆船』になるのは昭和15・6年以降のことです。



●小廻し廻船模型（奉納船）

諸富町・大堂神社から発見されたこの船模型には『明治七年八月二十日 佐賀縣管下 牛島町 下村辰右エ門船 沖船頭勝次郎』の墨書きがあります。牛島町とは現在の佐賀市東佐賀町のことと、下村辰右エ門は、佐賀藩御用達の商人として知られます。明治初期、沖船頭(雇われ船頭)の勝次郎は、この船でいったい何をどこへ運んだのでしょうか。『海岸場出入船舶物品調』(明治11～12年・長崎県勧業課)によれば、長崎と諸富の間で、特に、米・反物・薬種等が取り引きされていたことがうかがえます。



●北前型弁才船模型（奉納船）

諸富町・大堂神社から発見されたこの船模型は、その船型・構造から、江戸時代後期から明治時代初期の北前型弁才船であることが判明しました。大坂・江戸の二大市場を中心として、瀬戸内、日本海などの幹線航路を充実させ、廻米をはじめ日常物資を運搬していたことはこれまでよく知られていましたが、この奉納船の発見により、有明海を通じ、諸富津までのルートがよりいっそう鮮明になってきました。

(学芸員 山崎和文)

常設展案内

古鏡の世界—県内出土の弥生・古墳時代銅鏡—

会期：12月2日（金）～1月22日（日）

魏書によれば、西暦239年、魏の小帝に朝貢した邪馬台国の女王卑弥呼に対し、「汝の好物」として下賜された品々の中に100面もの銅鏡を見い出すことができます。「倭人の鏡好き」は3世紀の東アジア世界では周知の事実であったのかかもしれません。この古鏡に対する我々日本人（倭人）の特別の関心は、ある時は古美術蒐集の対象として、またある時は考古学研究の対象として、現在に至るまで連續と続いているように思われます。弥生時代から古墳時代の我が国においては、鏡の大きさと量こそが、富と権勢の象徴として何よりも重視されたのでした。したがってこの鏡をめぐる人々の様々な動きこそが、我が国における国家形成の過程を知る上で、何よりの手がかりとなるのです。まさに「古鏡に映じた歴史」と言うところでしょうか。今回の展示では、普段一堂に展観する機会のない県内出土の古鏡を集めてみました。歴史的背景に想いをいたすも良し、美術工芸的に味わうも良し。それぞれに観覧していただければと思います。

そもそも倭人と鏡（銅鏡）との出会いは紀元前2世紀後半（弥生時代前末期）に遡ります。当時朝鮮半島南部から、ようやく稻作文化の定着した我が列島へ青銅器文化を携えた人々が多数渡来し、朝鮮半島で独自の発達を遂げていた多錐細文鏡がもたらされました。この鏡の最大の特徴は、凸面鏡である中国鏡と異なり、凹面鏡であることです。したがって、顔を映してもそのままの像を見るこ

とはできません。化粧具ではなく、北方シャーマニズムの伝統に由来する祭器のひとつだったのでしよう。

続いて紀元前1世紀の後半頃には中国前漢代の鏡が入ってきます。これは「分かれて百余国」をなしていた倭のクニグニが朝鮮半島北部に設けられた前漢の植民地樂浪郡を介して、漢帝国の政治的秩序に入っていったことの証しと考えられます。前漢鏡でも銘文を主文様とする銘帶鏡の類は、最も代表的なものです。弥生時代の遺跡からこの種の銘帶鏡が出土するのは、主に福岡・佐賀の両県に限られます。唐津の末盧國のほか、佐賀平野側にも有力なクニがあったことが窺われます。

後漢代に入っても2世紀の初め頃までは北部九州で方格規矩鏡や連弧文鏡の集中的な出土が続きますが、2世紀後半以降、中国鏡は分割された破鏡としての出土が多くなるとともに、分布も近畿・北陸地方まで拡大します。さらにこの時期北部九州を中心に中国鏡を模倣した国産の小型偽製鏡も出土します。これらの現象は後漢書や魏書に見える「倭国大乱」や後漢王朝の衰退、さらには樂浪郡を占拠した公孫氏政権の存在と関係するものと考えられています。

倭国への中国鏡の流入が本格的に再開されるのは、冒頭に述べた西暦239年の魏への朝貢を待たなければなりません。3世紀における少なくとも4回の朝貢においてもたらされたであろう鏡については、3世紀末～4世紀に近畿地方を中心として出土する三角縁神獸鏡であるとする説が有力ですが、中国での出土が1面も見られないことから、なお疑問視する声も少なくありません。古墳時代前期（4世紀）には中国鏡を模して、大小各種の偽製鏡が作られますが、中には独自の意匠を持つものも認められます。しかし、やがて権力の象徴が甲冑や馬具・金銅製装身具などに移行する中で鏡も小型・粗製化してその歴史的使命を閉じることとなるのです。

(資料係長 蒲原宏行)



重文 流雲文縁方格規矩四神鏡(唐津市桜馬場遺跡)

エッセイ

蛾の話

1. 蝶と蛾

蛾の調査をやっている人に話すと、「蛾…ですか。」と、変な顔をされることがある。これが蝶やクワガタムシなどだったらそうでもないかもしない。もっとも、蛾はいくらたくさん採っても、自然爱好者から文句が出ることはないのでその点では安心している。

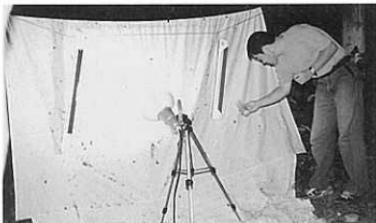
蝶と蛾は、チョウ目という同じ分類群に属する昆虫である。このうち、セセリチョウ上科、アゲハチョウ上科、シャクガモドキ上科に属する全体の約10%の種類をチョウと呼んでいる（研究者によつては、シャクガモドキ上科を蝶に含めない場合もある）。その残り90%の種類が蛾である。では、蛾は蝶とどこが違うのだろうか。

よく言われるのは、蛾は夜間活動性である、羽を屋根型にしてとまる、触角が毛羽立っているとか言うことであるが、いずれも例外があり、日中に活動する蛾も案外多い。また、一般に蛾は毒を持つと思われているが、そのような蛾はごくわずかであり、筆者は今まで、蝶にひどい目にあわされたことはない。

両者のもっと確実な区別点は、飛ぶときに後ろ羽と前羽つなぐ、翅刺と呼ばれる器官の有無で（ただし実体顕微鏡で検鏡しないと分からない）、蛾はこれを持つ。蝶はこれを持たない代わりに、前羽と後ろ羽が重なる面積を広くして、羽がバラバラにならないようにして飛んでいる。しかし、この点においてもやはり一部に例外があり、結局両者を生物学的に区別する妥当な根拠はないと言うことになる。

2. 苦労が多い蛾類の調査

夜間活動性の種類が多い蛾類の最も代表的な採集方法は、夜間の灯火採集である。これは、蛾類が光に集まる性質（正の走光性）を持つことを利用した方法で、調査地点で白布を垂直に張り、このそばで水銀灯などを点灯する。晏天、無風、高温、多湿など条件のよい日であれば、多数の蛾が飛来して白布にとまる。この中からバランスよ



く採集していくのである（写真参照）。

ところで、この採集法の電源には発電機を用いる。このほか水銀灯、白布、その他の採集道具などを含めると、かなりの重量になる。これをザックに詰め込み、日没前にあたかも登山をするかのような格好で、山道を登っていくのである。そして、日没直後から採集を始めて、採集を終えて暗い山道を下山するのは夜半近くとなる。

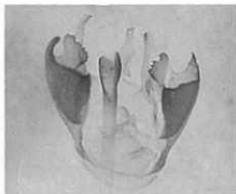
また、採集した蛾類の同定においては、図鑑との組合せで簡単に同定できない場合がしばしばある。次ページの3枚の写真的蛾は、同じ種類に見えるが、実はそれぞれ別種である。ユウマダラエグシャク属（*Abraxas*属）の蛾で、各地の調査でたびたび採集されるものである。

このような場合、交尾器を調べて同定を行うことが多い。交尾器とは文字どおり交尾するための器官で、堅いキチンと呼ばれる物質で作られている。交尾器は、通常同種のオスとメスの間だけて交尾が成立するように、形が特殊に分化している。つまり、交尾器の形が違つていれば別種と考えてよく、これを調べることで正確な種の同定が可能となる。

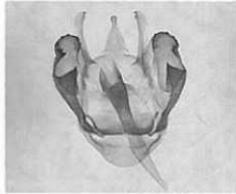
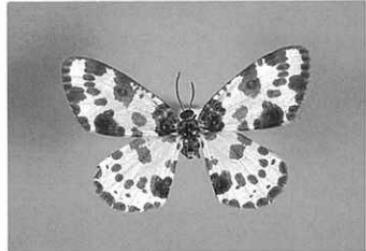
交尾器を取り出すには、まず交尾器がある腹部先端を切除し、これを10%水酸化カリウム溶液に入れて加熱する。すると、周囲のタンパク質が溶解するので、双眼実体顕微鏡下で注意深く交尾器だけを取り出す。これを図鑑などの交尾器の図と見比べて、人間に生まれてよかつたなどと、妙に安心しながら同定を行うのである。



ユマダラエダシャク *A. miranda* のオスと
その交尾器
採集地：杵島郡江北町



ヒトジマダラエダシャク *A. latifasciata*
のオスとその交尾器
採集地：鳥栖市九千部山



ヒメマダラエダシャク *A. niphonibia*
のオスとその交尾器
採集地：鳥栖市九千部山

写真の3種類の交尾器は、それぞれ横の写真のものである。左右対称の部分はバルバ（把握器）と呼ばれ、分類上のポイントとなる部分である。バルバの形の微妙な違いがお分かりであろうか。これらはオスの交尾器であるが、残念ながらメスの交尾器は種類間の差が明瞭でないものがあり、メスの場合はさらに悩みが続くのである。

3. なぜ蛾の調査を続いているのか

博物学の伝統あるイギリスでは、分布している昆虫類の90%が解明されていると言う。イギリスに比べて日本は国土が南北に長く、高い山があり、温潤であるなど環境が多様であるため、分布して

いる昆虫類は約29000種類と推定されている。その日本で、現在解明されている昆虫の割合は、研究の進んでいるチョウ、トンボ、セミなどを除くと、約30%にすぎない。

蛾類については近年研究が進み、実に国内で約4800種類が確認されている。しかし、今なお毎年30種前後が新たに見つかっているので、今後調査が進めば5000種類は記録されると予想されている。ちなみに、迷チョウなどを含んでも、日本で記録されている蝶は約290種類である。蛾類に限らず、自分たちが住んでいる地域の生物相を把握しておくことは一つの文化であり、自然の荒廃が進みつつある今日、その情報は今後ますます重要な価値を持ってくるであろう。

ところでわが郷土、佐

賀県では何種類の蛾類が記録されているであろうか。現在、筆者の知る限りでは約1400種類である。しかも、調査に行くたびに佐賀県未記録種が出るという現状では、まだまだ調査不足であるのは疑う余地がない。まして、県内のどこにどのような蛾類が生息しているかと言うような、細かい蛾類相の把握となると、ほとんど未解明と言わざるを得ない。

その種類数に対して、県内の蛾類研究者は著しく少ない。年々、変貌しつつある郷土の自然を目にするたびに、いまのうちにしっかりととした自然の記録を作っておかなくては、と思うのである。

(学芸員 中原正登)

行事案内

10月→12月

日 月 火 水 木 金 土

2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

日 月 火 水 木 金 土

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

日 月 火 水 木 金 土

4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

カレンダー内、□印は休館日

常 設 展				展 览 会					
博物館				美術館					
1号展	2号展	3号展	大展	1号AB展	2号展	3号展	4号展		
9/23 太古の巨木が教えることほか	9/23 佐賀藩の歴史ほか	10/7 佐賀の仕事着	10/7 くらしの器ほか	9/23 鎌田昭次 佐賀風物語	準 備				
11/27	11/27	11/27	11/27	11/13	準 備				
12/2 ほか さがの化石	12/2 ほか 古鏡の世界	12/2 ほか の運出船	12/2 ほか 佐賀の船	11/19 表紙原画 館藏の陶磁器から	11/19 工芸の佐賀 新郷士	第8回 佐賀蒼松会展 11/17㈭~11/20㈰ 館 会			
				12/18	第19回 佐賀県書作家協会展 11/23㈬~11/27㈰ 佐賀県書作家協会				
					第14回 九州二科文書写真部公募展 11/20㈮~12/4㈰ 二科文書写真部公募展				
					第35回 佐賀県学童美術展 12/9㈯~12/11㈰ 佐賀県学童美術展				
					第15回 佐賀新聞学生書道展 12/13㈬~12/18㈰ 佐賀新聞社				
					第35回 東光会佐賀支部緑光展 12/20㈮~12/25㈯ 緑 光 會				
		12/28~休館			準 備				

日 誌

平成 6 年度 博物館学実習

本年も各大学からの依頼を受けて、学芸員用資格取得の一貫として、博物館学実習を実施しました。本年はカリキュラムをさらに充実させ、例年より1日多い10日間の日程で、博物館運営の実際から自然科学・考古・歴史・民俗・美術工芸の各分野での資料整理・展示作業まで学びましたが、全員大変熱心に受講されました。

日 程 7月7日(木)~7月19日(火)

実習生数 18名

佐賀大学10名 西南学院大学3名 鹿児島女子大学1名 福岡大学2名 梅光女学院大学2名



受講生の皆さん(吉野ヶ里遺跡にて)

佐賀県立博物館・美術館報 第107号	平成 6 年 10 月 1 日
編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館	
〒840 佐賀市城内1-15-23 TEL0952・24・3947 FAX0952・25・7006	